

「反省をこめて感じた～強さと冷静さと客観性」

文教大学 星野晴彦

私は実は障害者福祉論を教えているのですが、精神障害者の方の支援についてはよくわかっていないということがよくわかりました。その反省を込めて、今回お話を伺って感じたことを四点申し上げます。

前提として講師の方の強さと冷静さと客観性が、ずっと胸に届くものがありました。

1 幻聴の正確な記憶

講師の方はご自身の幻聴を極めて正確に記憶しておられました。冷静にこれだけのことをお話になれる力はすごいと感じました。内容的にかなりすさまじいものであるために、どれほど怖かったことかと思いました。

幻聴については用語として知っておりましたが生活においてどれほどすさまじいかは、今回理解いたしました。

2 べてるの家の評価

幻聴を語り合うという方法について、いまだ十分に精神保健福祉の世界では認められていないと思います。

そのような時に一方的な言い方をするのではなく、向谷地氏のかかわりの巧みさや重さを十分認識したうえで、語っておられる姿が客観的で説得力がありました。

3 保護室について

一般市民は保護室を見ただけで恐れをなします。しかし講師の方はご自身の体験で緊急時にのみは有用であったと語られました。うまく言えませんが、そのような見方もあるのだなと感じました。

4 相模原の事件について

相模原の施設の事件については講師の方も触れておられましたが、私は別の角度から見えています。障害のある方について十分な理解ができず、違和感を持つというのはまああることだと思います。そして施設の職員は利用者と接していく中で、最初のやる気→驚き→共感できない挫折感 → コミュニケーションの可能性を見出す → 人間としての理解のプロセスを経るのではないかと思います。

今回の事件は一般市民が起こしたのではなく、施設の職員であった人間が起こしたということに問題があります。さがみ野の施設は確かにコミュニケーションがとりにくい方が多いかもしれませんが、施設として職員育成のプロセスが展開できていなかったことにとっても大きな問題があったように思います。

取り留めもないことを申しましたが、とてもリアルでわかりやすく勉強になりました。ありがとうございました。